はじめに

幸福に生きることは、人間の自己実現に密接に関わると思われている[(1)]。それゆえ、幸福に生きることの実現は、異文化コミュニケーション教育が、「教育」として、教育を受ける者の自己実現の達成を手助けする限りにおいて、その目的の一つからはずすことは出来ない。しかし、同時に、幸福という考えを扱う時、個人の幸福感という主観的な感情の充足と、ある特定の社会に存在する個々の人々が幸福であるような、社会全体として見た時の幸福感の存在、すなわち、幸福なる社会の実現、そして、その範囲をさらに広げ、「異なる人々」の属する社会における幸福の実現、という観点を、どのようにお互いに関わらせ、扱うのかという問いが、「異文化コミュニケーション」の性質から、必然的に出てくるのである。特定の個人Aを仮定しよう。Aが属している社会で幸福に生きることの実現、そして、そのAが属している社会の大多数の人々が幸福に生きることの実現、さらには、Aにとって「異なる人々」が、それぞれの属する社会で幸福に生きることの実現が、互いにぴったりと重なる形で成立するわけでも、単純に、Aの幸福の実現という中心点から水面に波紋が広がるような形で、幸福なる社会が次々に成り立っていくわけでもないのは明白である。一方で、それぞれがお互いに何らかの関連性を持っているであろうことを否定する者も、またいないであろう。それでは、「異文化コミュニケーション」の「教育」において、「幸福」はどのように考えていくべきなのか、この問いが教育の場で自然に出てくるのである。

本書は、その問いに答えようと、2007年から20年間毎年執筆・発表してきた論稿20本を時系列順で収録したものである[(2)]。これらの論稿は、「異文化コミュニケーション教育における『幸福』」というテーマのもとに続く形で毎年発表された論稿であること、また、それぞれに必然的に執筆時の世界の出来事が含まれていること、を考慮して、章のタイトルに、論稿の執筆年[(3)]をつけてある。既出論稿の続編にあたる論稿もあり、考察に使った情報が重複している箇所は何か所もあるが、一つ一つが独立した論稿であることを考慮して、全てそのままにして

ある。

ただ、各論稿の理解を妨げないと思われる語彙等においては、一貫性のために変更を加えてある[(4)]。

本書の刊行に多大なるご助力を賜りました㈱大学教育出版社の佐藤守社長に、心より御礼申し上げます。

異文化コミュニケーション教育における「幸福」

異文化教育の原点としての
「我々」と「彼等」のコミュニケーション問題を考える

目　　次

iv

はじめに　i

1章　(2007年)「幸福に生きる」　1

2章　(2008年)「幸福なる社会」　19

3章　(2009年)「幸福なる社会を生きる」選択　43

4章　(2010年)「我々の幸福なる社会」・「我々の正義」・「我々の愛国心」　62

5章　(2011年)「我々の幸福なる社会」の「彼等」の問題　82

6章　(2012年)「記憶の共有」－「出来事」の後の「赦し」　99

7章　(2013年)「出来事の後」・「ジェノサイド」　119

8章　(2014年)「ジェノサイドの後」・「正義」　137

9章　(2015年)「出来事」に対しての「コミットメント」　157

10章　(2016年)「他者の苦痛」の表象　179

11章　(2017年)「他者のメディア表象」に拘る　200

12章　(2018年)「他者の苦痛」・「物語と記憶」　221

13章　(2019年)「他者のメディア表象」への「拘り」と意義　245

14章　(2020年)「正義の扱い」　269

15章　(2021年)『走れメロス』:「正義の飛躍」　285

16章　(2022年)『ペスト』:「正義のための連帯」　300

17章　(2023年)『銀河鉄道の夜』:「自己犠牲」　315

18章　(2024年)『泣いた赤おに』:「他者と繋がる」　329

19章　(2025年)『手袋を買いに』と『ごん狐』:「異なる者との共生」と「希望」　343

20章　(2026年)『ハウルの動く城』:「共同体と戦争」　357

引用・参考文献　372

おわりに　422

1章
(2007年)

「幸福に生きる」

はじめに

「異文化コミュニケーション」の「教育」において、「幸福」はどのように考えていくべきなのだろうか。その問いに答えるための最初のステップとして、本稿では、個人の幸福なる感情が充足する、言い換えれば、個人が幸福に生きることの実現ということは、異文化コミュニケーション教育においてどのように扱われるべきなのかについて考察している。

1．自己と幸福

個人の幸福という感情を考えていく前に、幸福であるという自分の状態を感じることを可能にする個人の自己そのもの、すなわち自己概念について考えてみたい。自己概念とは、自分自身の知覚と経験、それに他者の自分に対する反応に基づいて形成された自分自身の像である。自分自身についての概念―自分とは誰なのか、他者はどのように自分を見ているのか―を持たない者はない。この自己概念というものは、あくまで自己の知覚から構成された像に過ぎないゆえに、たえず他者とのコミュニケーションに影響を受けるといえる。その際、人間は、自己の世界観が自分自身にとって意味を持った存在、首尾一貫した存在であろうと努めるために、他者に矛盾、不一致と映るものがあっても、それを無視しようとする傾向がある[(1)]。自己概念を高揚しないものの見方を歓迎しないことに相まって、自然に湧き上がってくる感情さえも、時には抑圧し認知しないようにしてまでも、既に確立してしまった自己概念を守ろうとするのである。こうした自己概念とコ

ミュニケーションの密接な関わりは、例えば、ハヤカワの挙げた二つの例で説明できる[(2)]。まず、自分が持つ自己概念を他者が否定し、なおかつ、その他者が自分にとって否定できない存在であった時、自分が認知した自己概念を否定し、無意識の世界にすべりこませるようなことが起きるのである。もう一つの例は、私たちが相手とのコミュニケーションが自己概念を高揚しない時に使う合理化のセリフである。

時には無意識の世界や合理化によってまで守ろうとする自己概念の核となる「自己」という存在、その大切な自己の最善のあり方、状態としての「幸福」を考えてみる時、「自己」と「幸福」ということを疑いの入らないストレートに直結した形で結び付け、自己イコール幸福というような自分の幸福なる状態を、言い換えれば、自分は文句なしに幸福だと知覚し続ける状態を、望まない者も誰ひとりいないといっていいだろう。しかし、誰からも強く望まれる自己の最善の状態でありながら、そのために何が必要条件としてあるかについては、全く個人の判断にゆだねられているものである。だから、日々の出来事に、報道されるニュースに、さらには、幸福ということを強く考えさせる小説や映画に、自分の得ることができた幸福と、得ることができなかった幸福を私たちは自然と比べあわせ、強く感情を揺さぶられ、自分自身の幸福なるものについて、また考えてしまうのである。正しい意味で自分が幸福でありたいと願い、正当性に疑いのない状態で自己の幸福を確信していたいのである。実際は、意識しないまま自分で好きなように、そこから幸福の定義を取り出し、自らが納得したいように解釈しているのだともいえるのである。いわゆる「幸福論」なるものが古今東西多く読まれてきたのも、幸福が万人の関心であることがもちろん一番の理由であろうが、同時に、自分自身の判断にゆだねられている、極めて主観的な幸福なるものが、その性質からくる個人の自由な判断基準のために、いかに個人を不安にさせているのかという現れであろう。「やはり自分は正しいのだ、幸福なのだ。」とか「なんと幸福はそういうものなのだったのだ、がんばろう。」などと呟きながら、人は、主観性と自由さに戸惑い、しかも幸福であることは自分にとって大切なことであるために、拠り所とできる「幸福論」を必要とする。

しかし多くの人々を納得させてきた、いわゆる名著とされる「幸福論」が、幸福はいかなるものかをどんなに上手く説明しても、結局それぞれ個人の自己概念

だけが、自分の幸福を感じる唯一の拠り所であるという事実は、どんな「幸福論」でも認めるしかないのである。反対から言えば、優れたといわれている「幸福論」ほど、素直にそれを認めているのである。「幸福になろうと欲しなければ、絶対幸福になれない。これは、何にもまして明白なことだと、ぼくは思う。したがって、自分の幸福を欲しなければならない。自分の幸福をつくり出さなければならない。[3]」「いうまでもなく人間の幸福なあり方、いや人間の生き方全体にとって主要なものが、人間自身のなかに存するもの、人間自身のうちに起きるものだということは明らかである。[4]」

世界でおそらく一番愛された漫画であり、一番有名な犬であるスヌーピーの出てくるシュルツの『PEANUTS』シリーズに、幸福の様々な定義が全頁で与えられているベストセラーがある。本の最初から終わりまで、左頁に幸福の定義があり、右頁にその定義の意味するところを示す絵を描くというパターンが続く。その本の最後を締めくくる絵と定義は以下の通りである。アイスクリームを持ったチャーリーと、花を持ったルーシーが右頁に描かれ、左頁には、「“Happiness is one thing to one person and another thing to another person.「しあわせはそれぞれに好きなもの[5]」。「幸福は人によって違うんだよ」というところであろう。誰にも否定できないであろう幸福の定義がここにある。幸福は人によって様々なのである。

２．様々な幸福

この節からは、その様々な幸福と個人の選択について、映画版が、ニコール・キッドマンのアカデミー主演女優賞受賞で話題となった小説 *The Hours*[6]（『めぐりあう時間』）を例にして考えをすすめてみたい。この小説では、主に３人の女性の幸福のための選択が描かれ、読者は「幸福」という言葉に何度も何度も出会い、幸福について考えていくようになる。この３人は、その中の一人でもあるヴァージニア・ウルフの書いた小説『ダロウェイ夫人』を共通に結びつけるものとして持つことと唯一の例外を除けば、直接には出会うことがない、異なる時・場所に生き、各自はそれぞれの幸福について考えて人生を選択していく。

まず一人目、1920 年代、ヴァージニアにとって、幸福とは、入水自殺するこ

とで完成するしかない。彼女の夫に当てた遺書には、幸福という言葉が何度も出てくる。

> "You have given me the greatest possible happiness. You have been in every way all that anyone could be. I don't think two people could have been happier till this terrible disease came." (p.6)
> (あなたは私に可能なかぎりの最大の幸福をくれました。あなたはあらゆる点で考え得る最高の人でした。この恐ろしい病気になるまで、私たちほど幸せな二人はいなかったでしょう。)

そして、遺書の最後に再度繰り返される言葉—"I don't think two people could have been happier than we have been."(p.7)(「私たちほど幸せな二人はいなかったでしょう。」)

一方、1950 年代を生きるサラにとっては、幸福とは、少なくとも、幸福である振りをする必要のない場所へ、家庭を捨てて逃げることでしかなかった。彼女の幸福が存在しないことを彼女だけが気づいている家庭を立ち去ることである。そして彼女はそれを実行する。小説では、その最終選択自体は、一度も、「幸福」という言葉では説明されないが、彼女の生活に彼女の思う幸福が欠如していることは明らかである。幸福な家庭を築いていることを疑いもしない夫が自分を寝室に呼ぶ声を聞きながら、"What if that moment at dinner—that equipoise, that small perfection—were enough? What if you decided to want no more? (p.214)"(「もし、夕食でのあの時の、あの均衡、あの小さな完璧さで十分とするなら、もうそれ以上は望まないと決めるなら」) と自分自身に言い聞かせようとするけれども、それは難しい。

1990 年代に生きるクラリッサにとっての幸福は、30 年以上経てわかるのだが、18 歳の朝にすでに気づいたもの、そのものであった。

> It had seemed like the beginning of happiness, and Clarissa is still sometimes shocked, more than thirty years later, to realize that it was happiness; that the entire experience lay in a kiss and a walk, the anticipation of dinner and a book… There is still that singular perfection, and it's perfect in part because it seemed, at the time, so clearly to promise more. Now she knows: That was the moment, right then. There has been no more. (p.98)
> (丁度、幸福の始まりのように思え、クラリッサは 30 年以上経ったのに、まだ時

にショックを受ける。それこそが幸福だったのだと知ってである。その全ての経験は、キスと散歩、夕食と本への期待。（中略）なおまれに見るような完璧さがあった。その時には、もっと幸福を約束することは明らかに思えた。ゆえに完璧だったのだ。今になって、彼女にはわかる。それこそが幸福の瞬間だったのだ。それからはもうなかったのだ。」）

クラリッサの 18 歳の朝の幸福とともに存在したリチャードは、30 年後の今はエイズの末期状態にある。彼の投身自殺の直前、彼も同じ朝について彼女の様子を思い出し語る。そして、“I don’t think two people could have been happier than we’ve been.（p.200）”（「僕たちほど幸福だったものはいないよね。」）と言い残し、窓から消えていく。クラリッサは、それを阻止することもできない。幸福なるものを一緒に体験した人物の投身自殺さえ、彼女は阻むことはできないのである。

３．自己の選択と説明責任

主人公のうちの二人、ヴァージニアとサラは、幸福の探求における自らの選択の説明責任を、彼等を愛する人々に対して完遂できていない。ヴァージニアは、遺書では、彼女の選択の理由を説明する、しかし、すでに彼女の生が終わった後読むのでは、夫はそれについて直接問うことはできない。サラも、家を黙って出ていく。夫（と二人の幼い子ども）へ手紙は残したが、すでに立ち去っている彼女に、誰も質問し反論する機会は与えられない。この送りっぱなしの、受取り手に応答の余地を与えない二人のコミュニケーション行為は卑怯なのだろうか。幸福そのものが自己の問題であり、幸福を求めることは誠実な行為だとしても、そのための選択によって、自分を愛している人々の思いを傷つけることが想定される時、説明をせずに選択するということは許される行為だろうか。行為だけ聞けば、そう思う者もいるだろう。

しかし、この小説を読む者がそう感じることは予期されていないと思われる。なぜなら、小説では、二人が幸福への自分の選択を他者に完全には説明できない状態におかれていることが、読者に理解可能にされているからである。私たちは往々にして、言葉では「彼（彼女）は自分で結局選択したのだ」と他者の進んだ

道を指していう。確かに、選択する自由自体はいつも存在するように見える。しかし、その選択は、文化と社会の制約のもとで、多くの人々にとって、過酷で難しい中にある。自分らしくよく生きること、つまり自分が幸せになることの意味を気づいても、必ずしも実行できないという中で、選べないための苦痛と、選んだ後の苦痛の両方に耐えながら、それでも選択してきた者がたくさんいる。その多くが社会的に弱者であるマイノリティグループ、また、文化で下位におかれてきたグループであり、この小説に描かれた女性達は、セクシュアリティの葛藤を持っている点も含めて、そうであり、時代や文化の制約の中で、誠実に幸福への選択を考えても、その気持ちを時に説明できないという問題が起こる。もし彼らが相手に応答の機会を与え説明責任を果たそうとしていたら、彼らの選択そのものが遂行を阻まれたであろうから。

小説のように、曖昧であった箇所に、再び戻って読み直すことも出来ず、主人公の葛藤や決断を短い時間で誤解なく描いてみせる必要のある映画では、小説以上に主人公の気持ちの説明が何らかの形で与えられる必要がある。実際、映画では、上記にあげたヴァージニアとサラの説明責任が完遂できなかった理由を、原作以上にはっきり示すコミュニケーションを入れることで、意図的に、見ている者の理解を助けていると思われる。まずヴァージニアについては、彼女自身による夫への説明が小説よりかなり長くなっている。ロンドンに帰ろうとして駅で夫に阻止された時、彼女が説明しようとしたコミュニケーションである。小説では以下のようになる。

> Virginia says, “It’s time for us to move back to London. Don’t you think?” “I’m not at all sure,” he answers. “I’ve been better for a long while now. We can’t haunt the suburbs forever, can we?” “Let’s discuss it over dinner, shall we?” “All right, then.” “Do you want so much to live in London?” he asks. “I do,” she says. “I wish it were otherwise. I wish I were happy with the quiet life.” “As do I.” “Come along,” she says. She keeps the ticket in her bag. She will never mention to Leonard that she’d planned on fleeing, even for a few hours. (p.172)
>
> （ヴァージニアは言う。「ロンドンへ戻る時じゃないかしら。そう思わない？」「それはどうかなあ。」と彼は答える。「ずいぶん長く調子がいいわ。永遠に郊外にいることができるってわけでもないでしょう。」「夕食の時にそれは話そう。」「それじゃ、いいわ。」「そんなにロンドンに戻りたいの？」「ええ。」と彼女は言う。「そうでなけ

ればいいのだけど。この静かな生活で幸せならいいのだけど。」「僕もそう願うね。」「行きましょう。」彼女は言う。バッグに切符は入れたままである。逃げてロンドンに行こうとしていたこと、それは数時間であったとしても、彼女がレオナルドに言うことはもはやないだろう。）

映画では、彼女はもっと雄弁である。

“My life has been stolen from me. I am living in a town I have no wish to live in. I am living a life I have no wish to live. And I am asking how this has occurred.”
（「私の人生は私から取られてしまったの。私は望んでもいない町に今は住んでいる。望んでもいない生活をしている。私は、一体どうしてこんなことが起こったのか聞いているの。」）

“This is my right. This is the right of every human being. I choose not the suffocating anesthetic of the suburbs, but the violent jolt of the capital. That is my choice. The meanest patient, yes even the very lowest, allowed some say in the matter of her own prescription. Thereby she defines her humanity.”
（「これは私の権利なのよ。すべての人間の権利なの。田舎の息詰まる退屈さではなく、ロンドンの激しい喧騒を選ぶの。それが私の選択なの。もっともつまらない患者でさえ、自分自身の処方箋について言うことは許されるはずでしょう。それによって、自分の人間性を示せるのだから。」）

“I wish for your sake, Leonard, that I could be happy in this quietness. But if it is a choice between Richmond and death, I choose death.”
（「レオナルド、あなたのためにも、この静けさの中で幸福でありたい。でも、リッチモンドと死のどちらかを選ぶのであれば、私は死を選ぶわ。」）

結局は、雄弁であっても、ヴァージニアの健康を案じる夫に連れて帰られることでは小説と一緒である。この後それ以上は続けて彼女は主張できない。しかし、少なくともそれまでの彼女の説明は、見ている者に彼女の抱える苦痛そのものを明確に伝えたといえる。小説にしても、映画にしても、たとえ説明をしても夫に伝えることができない、わからせることができないで、彼女の行動を阻止されるのである。彼女自身の病は、この場所での生活しか彼女に可能とさせない。しかし、彼女にとっては、それは生きることではない。ヴァージニアに残されたのは、応答できない遺書の形で、自分の幸福への選択をやり遂げるということだったのである。

サラについても、映画では、心情の理解をもう少し助けようとしている。小説では、「幸福」という言葉を使っては語られなかったサラの選択だが、小説の場面設定はそのままに、夫のダンに「幸福」について言葉で語らせることで、それを聞きながら苦しむサラを対照的に描いている。

> "I thought of bringing her to a house—a life—well, pretty like this. And it was the thought of the happiness…the thought of this woman…the thought of this life…that is what sustained me." "I had an idea of our happiness."
> (「俺は、彼女を家に連れていくことを考えたよ。人生にね。こんな感じかな。幸福の考えそのものだった。この女性、この人生を考えることが、僕を頑張らせたんだ。」「僕は自分たちの幸福について考えがあったんだ。」)

"our happiness"(「自分たちの幸福」)なるものの、ダンの安易で傲慢な仮定が、結局、ダンがサラの悩みに気づかせることをさせないのであり、最終的には、彼女が説明できないまま、ある朝永遠に家を出るという選択に行ったことを納得させるコミュニケーションとなっている。さらに、ダンと同じ類の幸福を共有できないまま仮面をつけて生きることができなかった彼女の、それしかなかった選択と、そして選択後の人生が、その時代に「それ以後は幸福に暮らしました」という安易なものではないことも含めて、映画では、再度、彼女の言葉で語らせる。

> "There are times when you don't belong and you think you're going to kill yourself. Once I went to a hotel. That night…later that night, I made a plan. Plan was, I would leave my family when my second child wad born. And that's what I did. Got up one morning, made breakfast, went to the bus stop, got on a bus. I'd left a note." "I got a job in a library in Canada. It would be wonderful to say you regretted it. It would be easy. But what does it mean? What does it mean to regret when you have no choice? It's what you can bear. There it is. No-one is going to forgive me."
> (「自分が属するところもなく、自殺するんだと思う時がありますよね。私は一度など、ホテルに行きました。その夜です。その夜おそく、私は計画を立てました。その計画は、二番目の子どもが生まれたら家を出るというものです。そしてそのようにしたのでした。ある朝おきて、朝食を作り、バス停に行って、バスに乗りました。手紙を残したのです。カナダの図書館で仕事を得ました。したことを後悔したということができるなら素晴らしいかもしれません。簡単ですから。でもそれがどんな意味を持つでしょう。選択が全くない時に、後悔することなんて。それはあな

たが耐えていくことなんです。だからそうするのです。誰も私を赦さないでしょうから。」）

結局、ヴァージニアが「死」を選んだのと同じで、幸福になるためにサラは「生」を選んだのであり、他者の理解を得たり、赦しを期待して選択する余裕はない状態に置かれていたのである。

4．幸福と死の選択

小説でも、映画でも、サラと、現代に生きるクラリッサが少なくとも生を選び、その中でもクラリッサは「自己」と「生」と「幸福」という両立に一番近いところにいるようにも見える。彼女とかつて幸福を共にしたリチャードが投身自殺をする前に、これから続く時間について言う言葉がある。

> “But there are still the hours, aren’t there? One and then another, and you get through that one and then, my god, there’s another. I’m so sick.（pp.197-198）
> （「でも、また時間はくるよね。ずっと、そして、それを切り抜けていくんだ。そして、また時間が。僕は、もう耐えられない。」）

彼には、訪れてくる生の時間はもう意味がなくなっていた。その彼の自分の目の前での投身を止められなかったショックや悲しみはもちろんクラリッサにも存在するが、それでも小説の最後で彼女は、自殺をしたリチャードに心でこう語りかける。生きることに幸福を見いだす努力をしていくであろう自分と、死を選んだリチャードとでは、自らの幸福の場所も時間も違うことを確認したのである。“Forgive us, Richard. It is, in fact, a party, after all. It is a party for the not-yet-dead; for the relatively undamaged; for those who for mysterious reasons have the fortune to be alive.（p.226）”（「私たちを赦してね。リチャード。結局パーティーなの。死んでいない者たちの、まだそれほど程傷ついていない者たち、何らかの不思議な理由で生きる幸運を持っている者たちのね。」）それは素晴らしいことなのだ。“It is, in fact, great good fortune.（p.226）”（「実際、それは大きな幸運なのだ。」）そして、生き残っている者として彼女は “Here she is with another hour before her.”（p.226）（「彼女の前には、また別の時間が存在しているのだ。」）と強く認識

する。そして生き続けることを選ぶような彼女であれば、自分のこれからの生に幸福を感じるかもしれないのだ―そう小説は言っているように、そこで終わる。

リチャードの死とヴァージニアの死は、これ以上の生の時間を持つことが、幸福であるのではなく、むしろ、幸福であるために、そこで生の時間を止める必要があるとした者達によってもたらされた死である。やはり死を自ら選択したように見えるソクラテスの幸福についての田中の論考によると、プラトンの『クリトン』の中で、脱獄を勧めるクリトンを説得する過程において、なぜ自分は死を逃れないのかを、ソクラテスが二つの理由で説明しているという[7]。一つは、不正なことだからであり、もう一つは、脱獄して死を逃れても、ソクラテスは幸福には生きることができないからである。丁度個人個人が、それぞれ自分の生き方を持ち、その自分の望む生き方の実現をすることで、人生が幸福なものになるように、ソクラテスにとっては、正義に従って生きる時、幸福に生きることができたのである。となると、もし逃げれば、それは、生きていても、彼の生き方は損なわれ、彼にとっては、幸福ではない。死刑に従えば、ソクラテスの生き方そのものを損なうのではない。死はソクラテスにもたらされるが、放棄されることがなかった自分の生き方によって、彼自身は「死に至るまでは生きつづける」ことができる[8]。さらに、ソクラテスが、クリトンに確認する言論が紹介されている[9]。大事なことは、一つは「生きる」ことではなく、「よく生きる」ことであり、その「よく生きる」ことは、生きがいのある、幸福な、よい生活であるという言論であり、もう一つが、その「幸福に生きる」ということが、「正義(ただ)しく生きる」に一致するということである。田中は、これらを紹介した後、前者は万人が認める言論で、後者は、万人が同意するとは言い難く、不正なことをしても不幸にならない人々がいるが、少なくともソクラテスにとっては、幸福に生きることは「正義(ただ)しく生きる」ことであったのだと示唆する。そしてこう続けている。

> 人間にとって生きるとは、ただ息をしているということではない。まして、その息をしている時間を延長することでもない。むしろ、われわれに許された時間の中で自分の生を生きることだろう。それは言い換えれば、自分で自分の行為を選び取ることであり、それによってまた自分の生き方（あるいは法、あるいは言論）を作り出してゆくことであると思われる。友達思いのクリトンはソクラテスの生命を救うことに心を砕いたけれども、ソクラテスはすでに幸福に自分の生を全うしていたのである。[10]

歴史に残る哲学者ソクラテスにとってだけではなく、結局、ごく普通の人である私達にとっても、この「よく生きる（幸福）」ことは、自分自身の生のあるべき姿そのものなのである。「よく」と「生きる」と分離して考えられるものではなく、「生きる」ことが「よく生きる」ことを兼ねていることで、自分らしく生かされ幸福であることを実現できている、または、実現できるであろうという予感を持って、私達は本当に「生きる」ことができるのである。

映画では、死を選択したヴァージニアと家を出たサラの二人の苦悩と、他者に説明できない、または説明することが不可能である選択について、小説より長いコミュニケーションで私たちの理解を助けたように、そして、特にヴァージニアには雄弁に語らせたように、最後も、映画では、「生」を永遠に失ったヴァージニアに優しい。映画の方は、最後にヴァージニアの入水するシーンと彼女の言葉で終わる。

> “Dear Leonard, to look life in the face, always to look life in the face, and to know what it is, to love it for what it is. At last to know it. To love it for what it is. And then to put it away.” “Leonard, always the years between us, always the years, always the love. Always the hours.”
>
> （「親愛なるレオナルド。人生を直視すること、いつも直視すること、そしてそれが何かを知ること、そのために愛すること。ついに知ること。そのために愛すること。それから手放すこと。」「レオナルド、私たちの間には長い年月が、その年月があり、愛がありました。いつも時間があったのです。」）

「幸福」という感情をつきつめて「死」を選ぶしかなかったヴァージニアを最後に映し出した映画の理解の示し方は、映像的効果のための判断もあろうが、小説とはまた違った優しさがあるように感じさせる。窓から落ちていったリチャードも、水面下に消えたヴァージニアにも、「よく生きる」ことは、この世で「生きる」ことにならなかった。ソクラテスにとってはそれが正義に生きることであったように、ヴァージニアにも、リチャードにとっても、彼等の違った幸福の条件がある。そして、個々の人間にとっての幸福の条件は異なるのだとは理解していても、それでも、クラリッサが言うように、幸福を感じる瞬間を「感じる」ことができるのは、「生きている」者のみであり、幸福はその生きている者達のパーティーであり時間であるしかないともわかっているから、私たちはそのパーティー会場を去り幸福な時間を終えた者に優しく涙する。

５．他者の幸福と苦しみ

自分の幸福への選択ということを私達に考えさせる小説は沢山存在する。その内の一つ、*Ordinary People*[11] は、私が若い時に感銘を受けた小説で、「自己」と「幸福」ということを考えるためにできたような小説である。その時にまだ学生だった私に強烈に印象に残ったコミュニケーションも、まさに「幸福」という言葉を使っていた。弁護士の父親、明るく社交的な母親、二人の健康な兄弟、そうした何の問題もないような恵まれた家庭に、長男の水死という事故がおこる。生き残った弟のコンラッドは、一緒にいて災難にあった兄の死に対する責任と、自分だけが生き残ってしまったという罪悪感に悩まされる。しかし、それが彼の心の病気となるまでエスカレートする一番の理由は、自慢の息子であった兄の死をうまく受け止められない母親ベスにあるのである。それに気づかない父親カルは、自殺未遂まで図る息子コンラッドを、何とか助けようとする。そして、愛する妻こそが息子を追い詰めているのだということ、そして「兄の方が生きていたら」と感じてしまう母親としての心の闇を見つめることなく、残った弟の苦しみに対して誠実に対峙しない妻のコミュニケーションこそが問題の原因なのだと気づいていく。息子への対処方法で、夫から自分が責められていると感じたベスは自己防衛的になり、声を荒げる。仲裁に入ったベスの弟はこう言う。

> “Honey, nobody wants anything from you,” Ward says. “We all just want—Cal and Con and everybody, we all just want you to be happy.” (p.239)
> (「姉さん、誰も君に何かをしてほしいといっているわけではないんだよ。僕たちはみんな、カル（夫）もコン（息子）も、みんなお姉さんに幸せでいてほしいだけなんだ。」)

ベスは、弟にこう言い放つ。

> “Happy!” “Oh, Ward! You give us all the definition, will you? But first you’d better check on those kids. Every day, to make sure they’re good and safe, that nobody’s fallen off a horse, or gotten hit by a car, or drowned in that

swimming pool you're so proud of!" (p.239)
（「幸せですって！」「ねえ、ワード。その全ての定義を頂戴よ。でもその前に、あなたの子どもたちをチェックしてからね。毎日、安全でうまくいっていて、誰も馬から落ちたり、車にはねられたり、あなたの自慢のプールでおぼれないようにね。」）

その時点で、聞いていた弟の妻は責めるような声をあげ、後ろ向きになって両手を顔にあてる。ベスの声が続く。"And then you come and tell me how to be happy. (p.239)"（「それから初めて、私にどのように幸せになるかを教えて頂戴。」）しかし、「幸福」という誰にでも求めることが正当であると感じるはずの、この母親ベスのコミュニケーションに出てくる幸福についての吐露が、なぜ共感を呼ぶことがないのだろうか。それどころか、なぜ許しがたい利己主義と読者は感じるのだろうか。再度、前節に挙げた小説 *The Hours* を出して比較して答えてみたい。

前節までで述べたように、幸福であるということのために、ヴァージニア、サラ、クラリッサの 3 人の女性は苦しむ。ヴァージニアにとっては、「彼女のために望んでいる」という夫の言うような生は幸福ではなく、サラは、夫のいう「私たちの幸福」という定義の生には空虚さを感じている。クラリッサは、数十年前の 18 歳の朝の「幸福の始まり」と思ったものが、まさに「幸福そのもの」であったことを悟る。幸福のために死を選んだヴァージニアや、家庭を出たサラが後に残した人々は、完全には彼女らの幸福の追求を理解できなかった。そのままの場で生き続けるであろうクラリッサにしても、リチャードとの別れは、幸福について分かち合えなかった後悔が残るものである。

しかし、彼女らに対して私たちは概ね共感できるだろうに、*Ordinary People* におけるベスの場合はどうだろうか。同じように自分の幸福という言葉に翻弄されるベスには憤りを感じるのはなぜだろうか。それは、ベスは、自らを一番傷つけない形で幸福を求め、ヴァージニアやサラやクラリッサは自分を傷つけることを怖れることは決してなかったからである。ヴァージニアやサラは、幸福であることの自分の感じる意味を周りに理解させることができず、苦悩の後で、一番愛している者たちを置いて旅立つしかなかった。ところが、ベスにとっては、周りに理解させれば自分の隠したい自己が明るみに出るために、反対に隠すしかなかった。長男の死に必要以上に拘泥して生き残った次男へ愛を向けられないとい

う母親失格の部分は闇においておかなければならない。それを認めることは、ベスにとって自分を貶めることなのである。心の病がひどくなっていく息子が、自分の持つ心の闇の部分をベスに気づかせてしまうために、彼女は息子の方の過剰な敏感さを責め、むしろ無視をして残酷な態度を取る。防御的になり、攻撃的になり、自分の闇の部分、自分の弱さを周りに理解させまいと必死になる。そして、家族の幸福を自らの闇を見つめないということで破壊しながらも、表面上の他人への見せ掛けの幸福な状態には、そのまま留まろうとする。他の人々にうつる「幸福な妻・母」であることが、彼女自身の価値であるがゆえに、そのイメージに拘りながら、一方、息子の幸福や夫の幸福の実現を妨げているのは彼女自身だったのである。

しかし、この物語と *The Hours* の展開には、大きな共通点が一つある。最後に、サラと同じように、ベスも夫と息子を置いて、ある朝家を出ることである。家を出る前、ベスとカルはこんな会話を交わす。

> "Do you love me, Beth?" "Stop it!" "Tell me! I want to know!" "I feel the same way about you," "that I have always felt! You are the one! You are the one who's changed!" (p.254)
>
> (「ベス、君は私を愛しているかい」「やめて」「言ってくれ。知りたいんだ。」「あなたに対して同じ気持ちでいるわ。いつも持ち続けてきたのと。あなたなのよ。変わったのは、あなたなのよ！」)

「愛しているのか。」という単純な問いに、ベスが自分の気持ちを述べる単純な形でなぜ答えられなかったのか。結局、「ええ、愛している。でも、丁度、息子を失って、自分に一番似た自慢の息子を失って、あ、死んだのが彼の方でなかったら、と思う自分がどうしても存在するように、私は、まず自分を愛しているの。そして、その自分の幸せのために、あなたという人ももちろん愛していたし、愛しているの。これが私のあり方なの。」ということを彼女は言えなかったのである。夫がそうした自分の内面に気づいてしまったことも同時に悟る。だから彼女は家にはいられない。気づかれてしまったこと、本当の自分の姿を認めて家族と向き合うだけの勇気は彼女にないのである。涙を流しながらベスはトランクを詰め、夜明けとともに家を立ち去る。彼女もまた自分の愛する者を失う運命なのである。しかし、愛する者を傷つけることなく自分も彼等と留まることができたら、「私

たちの幸福」なるものを信じることが出来たらと思い、葛藤を心に秘めながら家族とのテーブルに座っていた時のサラの苦悩は、ベスに涙を出させた自己憐憫の感情とは異質のものであり、それゆえ、二人の家を出る行為の他者への意味も全く違うのである。

母親と息子との間に交わされるコミュニケーションが、そうした二人の家を出る行為がいかに対照的な性質であったのかを見せてくれる。サラの苦悩に、その性質は理解できないながら、気づき始めていた幼い息子は、自殺をしないで彼を迎えに戻ってきた母親に、車の中でこう言う。“Mommy, I love you.” それに対してサラは “I love you too, baby, (p.192)” と答える。さして、再度 “I love you, sweetheart.” “You're my guy. (p.193)” と言う。一方、ベスは息子には黙って家を出る。彼女の旅立ちを朝知って動揺する息子は自分自身を責めるが、彼には非がないのだと言ってくれる父と話していく中で、今まで父親をどんなに頼りに思っていたかを初めて口にする。そして、その会話の最後に、父と息子は、丁度サラと息子が交わしたのと同じような言葉を交わす。

> “Well, don't admire people too much,” he says, tossing the remains of his coffee into the bushes. “They disappoint you sometimes.” “I'm not disappointed,” Conrad says. “I love you, man.” He winces, and his throat is tight, his eyes filled with sudden tears. “I love you, too.” (p.259)
>
> (「人をそんなに尊敬するなよ。」彼はそう言って、コーヒーの残りをやぶに捨てた。「時には失望するからな。」「失望なんかしないよ。」コンラッドは言った。「父さん、愛している。」カルはたじろぎ、のどが詰まった。目に涙があふれてきた。「父さんもだ。」)。

サラと息子の間のコミュニケーションは、ベスと息子には起こらなかった。起こり得なかった。そこにこそ大きな違いがあるのである。愛する者を置いてでる、置いてでない、ということが、私たちの愛する者への愛情を図る尺度ではない。自分の幸福という言葉を求める時、愛する者を置いていくしかないこともあるだろう。それは少なからず、その愛する者に激しい喪失感を生むだろう。「愛する者を失う」という出来事によって、その者達が感じている「幸福」の実現を、妨げることとなるのだろう。それが理解できるから、自己の感じる「幸福」の実現に、人は苦しむのである。その苦しみを、まず自分が最初に取って、葛藤し苦悩

した者を、たとえ、その大きな苦しみの後の選択の結果が他者に喪失の苦しみを引き起こすとしても、その他者の幸福の実現を妨げることに結果的になるとしても、私たちは理解し得るのである。

6．普通の人々の誠実なコミュニケーションとは

二つの小説ともに、“ordinary”（普通の）という言葉が、“happiness”（幸福）という言葉とともに、小説では重要な言葉となる。ごく普通の人々、普通の時間、普通の朝、その連続の中に、幸福になるための選択がある。生であれ、死であれ、別れであれ、幸福への選択を人間である限りやめることはできない。だから、全てが普通でありながら、選択そのものだけは他者に説明できないようなものになることもある。他者には特殊な選択、思いがけない選択に見えたり、愛する者からさえ理解されない身勝手な選択と言われたりすることもあろう。しかし、自己が判断する幸福への選択そのものを変えることは、自己を偽ることになる。最初に、自己概念とコミュニケーションということで、ハヤカワの二つの例をあげたが、結局、前者の例―自己概念を偽る必要がないことを願い、他者が自分の持つ自己概念を否定することないように希望し、そのために誠実に自分と自分の苦しみに向き合うことで生きていこうとする人間には、私達は、共感し、気持ちを分かちあおうとするのであろう。

しかし、後者の例―合理化することで、自己概念を変えないで自分を守ることだけに葛藤する者には、それはできないのである。心理学者、岸田秀は、コミュニケーション活動で多くの人が使う「自己嫌悪」という行動は卑劣なものだと指摘している[(12)]。例で彼が挙げた太宰治の『人間失格』の中の主人公要蔵は、自己嫌悪という隠れ蓑をもって、本来の卑劣な根性を正当化しているのであるという。丁度、誰かに意地悪な行為をした後、「あーあ。私、あんなことをして自己嫌悪」という時には、既に意地悪な発言をした自分は「架空の人間」で、意地悪などしない「現実の自分」に嫌悪されていることになり、何一つ自分は傷つかないでいられるということになる。岸田が指摘するように、非常に好都合の自己正当化である。実態は、意地悪なことを言った自分が「現実の自分」である。そういうことを言わない理想化された「架空の自分」が、「現実の自分」にすり返られ、本